

ガーナ:郵便局の検査官——●細見真也

昨年の秋、私は、およそ3週間、ガーナへ現地調査に出かけてまいりました。それは、ほぼ20年ぶりのガーナ訪問ということでしたから、人びとがどのように変わっているのか、それともほとんど変わっていないのか、さらには、どのような人とめぐり合うことができるのかなどなど、期待と不安のいり混った複雑な気持ちをもって、首都アクラを訪ねました。

そして、出張期間も終わりちかくなって、ひとりの郵便物検査官とめぐり合ったのです。ここでは、その出来事を紹介することにしたいと思います。

ところで、今回の現地調査は、短期間でありましたから、私は、ガーナ農業省に政策担当者を訪ね、農業の開発政策について彼らと直接、議論すること、それに、農業政策に関連する文献資料を収集することを第1の目標にしておりました。

しかし、アクラのホテルに着いて、面接のためのアポイントメントをとろうとしても、市内の電話事情は非常に悪く、そのため、アポイントをとる目的のためだけに、農業省などを訪ねてゆかなければならないほどでした。

もちろん、日本大使館とか国際協力事業団のアクラ事務所などでは、自家用車の運転手などがメッセンジャーの役目も兼ねますから、電話が不通になっても（上記、事業団の事務所には電話そのものがない！）外部との連絡にそれほど重大な支障は

ないと思われますが、私のような短期の出張者にとっては、電話が使えないということはきわめて不便なことでした。

しかし、幸いなことに、青年海外協力隊員の深井氏がガーナ農業省に勤務されていることもあって、農業省の政策担当者のほとんどは、きわめて協力的で、事前にアポイントをとっていなくても面接に快く応じてくれたうえ、貴重な資料なども提供してくれましたから、私の予定も、かなり順調に消化することができたと思います。

このような幸運にめぐまれて、私は、昨年1月に公表された最新の農業政策書をはじめ、さまざまな統計や文献資料を入手することができたのですが、これらの文献資料を日本へ送る段階になって、つぎのようなことを経験することになったのです。



ホソミズ・ラウンドアバウトの
(HOSOMI'S ROUND-ABOUT)
前に立つコブリソ村の農民たち

それは、アクラを出発する前日の9月29日のことでした。その日、私は、それまでに収集したおよそ50冊ばかりの貴重な文献資料を、ミカン箱の半分ほどの大きさのダンボールに詰めたうえ、それを航空小包で東京へ送るため「アクラ北郵便局」の窓口へ持参いたしました。

そこには、切手を売る窓口や小包などの重量を計る窓口などと並んで、最も出入口に近いところに郵便小包の内容を検査する窓口があるのですが、それも、輸出品の通関手続きのための窓口だと思えば、それほど不思議なことではありません。

さらにまた、その窓口にいる中年婦人の検査官が、それまで読みふけていた小説を横に置いて、私がダンボール箱から取り出した50冊もの文献資料のひとつひとつを1ページごと開いて、そのなかに何か挟まれているものがないかどうかを調べるというのも、ガーナのセディ紙幣、あるいは手紙文などが正規の手続きによらないで、いわば不正に海外へ送られるのを防ぐための検査であるとすれば、決して、それほど特異なことではありません。

もちろん、いかに気のながい私も、このような検査を見ているとかなりうんざりしたのは事実です。

それはともかくとして、私にとって不思議に思われたのは、この検査の目的が何であったのか、今もって判然としないことなのです。

なぜかと申しますと、この検査が、紙幣とか手紙文などのような薄い紙片を発見することを目的にしたものであったとすれば、当然のことながら、私が窓口へ持ち込んだ文献資料のページだけでなく、梱包を解いてダンボール箱の底にいたるまで、くまなく徹底的に調べなければならないと思われるにもかかわらず、くだんの婦人検査官は、ただ、文献資料のページを調べるだけで、ダンボールの梱包にはほとんど手を触れようとしなかったからなのです。

つまり、この検査は、徹底したものではなく、ある意味では、実に間の抜けた仕事のようにみえる、とい

うことなのです。

このような検査なら、ダンボール箱の梱包を工夫することによって、いくらでも自由に紙幣や手紙文などを不正に国外へ持ち出すことは、それほど困難なこととも思われません。

それでは、その検査官は、いったいなぜ、何の目的で、そのように間の抜けた検査のために1時間以上もの時間をかけたのでしょうか。

すでに申しましたように、その検査官をみてイライラした私は思わず「いったい何を探しているのだ!?!そこには、手紙や紙幣は挟んでないよ!」といったのですが、その検査官は、ただニヤニヤするだけで、まともに答えてくれなかったのですから、私には、検査の目的が何であったのか知るよしもあります。

しかし、考えれば考えるほど、この検査官の行為は不思議なことのよう私には思われるのです。

そこで私は、どうしても、この疑問を解き明かしてみたいのですが、そのばあいまず最初に思い起こしていただきたいのは、私にとってその検査が不徹底で間の抜けた行為とみられるのには、それが、「紙幣とか手紙文のような薄い紙片を探すという目的のもとに行なわれている」という私自身の仮定または思い込みに起因している、という点なのです。

たしかに、文献資料のページを一枚ずつ開いて調べるという行為をみれば、何か薄い紙片を探しているように思われるのですが、それは、あくまでも仮定であり、ひとつの思い込みにほかなりません。

このような自分の思い込みによって、相手の行為の持つ意味をいわば独善的に解釈してしまうことから、私たちが自由に解放されることは、決して容易なことではありません。

それにもかかわらず、私たちが、アフリカのように私たちの社会とは異質なようにみえる社会とそこに生活する人びとを理解しようとするかぎり、やはり、そうした思い込みから私たち自身を自由に解放するための努力をすることが、何よりも必要なことだと私には思われるのです。

なぜかと申しますと、これまでに述べてきました私の経験がものがた

がどれだけの時間ならば耐えられるであろう、などという予測のもとでいわば意識的に私を試そうとしたのではない、ということは確かです。

なぜなら、彼女は、私がどれだけの文献資料を持ち込むかということと事前により予測できるはずがなく、したがって、その検査をするのにはどれだけの時間が必要であるかということも、まえてもって予想することは

25年ぶりに再会したコプリソ村の農民と



っているように、その検査官は紙幣とか手紙といった紙片を探しているのだと思い込むことによって、その検査を不徹底で間の抜けた行為であると決めつけるだけでなく、検査官そのものを軽蔑することになり、相手とのあいだで一定の時間を共有することによって相手をじっくり観察することが不可能になってしまう、と考えられるからなのです。

そのように考えるとすれば、私が、「アクラ北郵便局」の窓口において偶然、出合ったあの検査官は、私が時間を共有することにおいて、どれほど耐えられるかを観察しつつ、私のなかに軽蔑した態度が出てくるか否かを試していた、とみることもできるのではないのでしょうか。

ただし、誤解のないように申し添えておきますが、あの検査官は、私

不可能であつたに違いないからなのです。

むしろ、あの検査官は、すでに本誌第1号でとりあげたガーナ北部の農民とおなじように、私との偶然な出会いを大切に、私を予見や先入観をもってみることがなかったため、私自身もまた、思い込みによって検査官を蔑視するという過ちからまぬがれることができた、とさえ私には思われるのです。

今回の調査でもまた、教えることより教えられることが多く、その意味において、この検査官をはじめとする諸氏に改めて感謝の意を表わしたいと思います。

(ほそみ・しんや/調査研究部)